

42122

教科書文庫

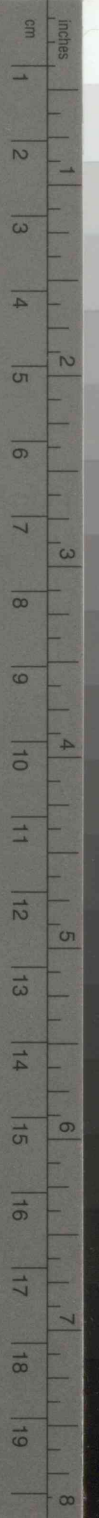
4
815
42-1968
20600 26494

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Nilg
資料室

女子教科 日本文典 上卷



明治四十一年一月六日

文部省檢定濟

高等女學校國語科用

西岡嘉藏著

廣女子
大書
教科

日本文典上卷



明治圖書株式會社

凡例

一、本書は高等女學校、又はこれと同程度の學校の教科書として著述したるものなり。故にその引用せる語句文例等も、成るべく女子に適當なるものを採用したり。

一、本書は易より難に進むの方法によりて、漸次詳密の度を加へ反覆これを説明したり。即、上卷に於て、主として品詞の分別を説き、中卷に於ては、品詞相互の關係を説き、下卷に至りて、更にこれを補説して、文章篇に終れり。故に本書を授けむとする人は、まづ三卷を通讀あらむ事を望む。

一、本書はまづ實例を擧げて、歸納的に文法上の法則を授け、且これを應用せしめむがため、種々の練習題を載せた

凡例

り但、何れも簡明を主として説明の餘地を存したれば、教授者の運用宜しきに適せむことを望む。

一、本書は字音・名詞及び動詞の語幹等に關する假名遣を載せず。蓋、これらのものは、一定の時期に學習せしむるよりも、寧ろ國語科教授の際、これに關聯せる場合に適宜授くるを以て、最有益に且便利なる方法と信ずればなり。

一、本書中の用語・分類等は、勉めて從來慣用のものに從ひ、敢へて創作せず。又その引用せる語句・文例等は、生徒の理解し易きを旨とし、往々作爲せしもあり。これ蓋、教科書編纂上寧ろ當然なることと信ずればなり。

明治四十年七月

著者しるす

女子教科 日本文典 上卷目次

文字篇

第一章	總論	一
第二章	漢字	二
第一節	構造	二
第二節	書體	三
第三節	音訓	五
第三章	假名	六
第一節	清音假名	七
第二節	濁音及び半濁音の假名	九

第三節 拗音假名……………一〇

第四節 撥音及び促音の假名……………一一

第四章 假名遣……………一二

單語及び文章篇 (上)

第一章 品詞の別……………一五

第二章 名詞……………一七

第三章 代名詞……………一八

第四章 動詞……………二〇

第一節 四段活用及びナ行變格ヲ行變格活用……………二一

第二節 上一段活用上二段活用……………二五

第三節 下一段下二段活用及びカ行變格活用……………二八

第四節 カ行變格活用……………三三

第五節 動詞の語尾の假名遣……………三五

第五章 形容詞……………三七

第六章 助動詞……………四〇

一 下二段の活用に等しきもの……………四一

二 ラ行變格の活用に等しきもの……………四二

三 ナ行變格の活用に等しきもの……………四二

四 形容詞の活用に等しきもの……………四三

五 三段に活用するもの……………四三

六 二段に活用するもの……………四四

七 活用せぬもの……………四四

第七章 副詞……………四六

第八章 接續詞……………四九

第九章 感動詞……………五〇

第十章 助詞……………五二

第十一章 熟語及び疊語……………五五

 第一節 熟語……………五五

 第二節 疊語……………五五

第十二章 文主語・述語……………五八

上卷目次終



女子教科 日本文典上卷

西岡嘉藏 著

文字篇

第一章 總論

人の思想を聲音によりて表すを言語といふ。言語は各國同じからず、これによりて、各國の國語を生ず。然れども、通常、單に國語と稱するは、わが國の言語なり。國語に對して他國の語を外國語といふ。

言語を書き表す符號を文字といひ、文字の方便によりて、

纏まりたる思想を書き連ねたるものを文或は文章といふ
花咲く。

の如きは、文の最簡單なるものなり。而して 花 咲く の
如く、文を組立つる一つ一つの意味を表すものを單語とい
ひ、は な さ く の如く、單語を組立つるものを聲音
といふ。音を表す文字を音標字と稱し、意味を表す文字を意
標字と稱す。

現今、わが國に使用する文字に二種あり。一は漢字にして
意標字に屬し、一は假名にして音標字に屬す。

第二章 漢字

第一節 構造

漢字は支那より傳來したるものにて、その數甚多く、且字
劃大抵複雑にして、種種なる部分より成る。例へば、

信 行 松 綿 贈 に於ける人 千 木 糸 貝の如く、左方に

ある部分を扁といひ、

効 没 却 雌 頃 に於ける力 爻 口 隹 頁の如く、右方に

ある部分を旁といひ、

字 空 草 笠 霜 に於ける宀 穴 艹 竹 雨の如く、上方に

ある部分を冠といふ。この外、^{ガク} 尸 ^{レン} 冫 ^ク 灬 ^シ 等の如く、特別の名稱

あるもの、亦少からず。

扁・旁・冠等は漢字を區別する標準なれば、常に、此等の部分
に注意するを要す。

第二節 書體

漢字は一字にして種種なる書き様あり。楷書・行書・草書これなり。楷書はまた眞書とも稱し、最多く用ひらる。行書は楷書を略したるもの、草書は行書を略したるものなり。この外、隸書・篆書などいふ書體あれど、普通一般に用ふること少し。以上の書體を例示すれば、左の如し。

篆書。	日	𠄎	山	川	天	地
隸書。	日	月	山	川	天	地
楷書。	日	月	山	川	天	地
行書。	日	月	山	川	天	地
草書。	日	月	山	川	天	地

第三節 音訓

明アキラカ月グツ行カウ惠ヱ生シヨウの如く、漢字には音と訓とあり。音とは、支那にての読み方にして、これを漢字音とも字音ともいふ。訓とは、我國にて國語に譯したる読み方なり。

明メイ月グツ行カウ惠ヱ生シヨウの如く、一字の漢字に二様の音あるものあり。右方に記したるを漢音といひ、左方に書きたるを吳音といふ。この外に、明朝の明をミンと呼び、行燈をアンドンなど呼ぶ唐音といふものあり。されど、これは極めて稀なり。

字音はわが國に傳はりて、多少原音を變じて一種の日本音となり、支那に於てもその古音漸次に變遷したるが故に、今日の支那語と我が字音とは、全く別種のものとなれり。

訓にも亦一字に二つ以上あるものあり。例へば、行をユク、

オコナフとよみ、生をイク、ウム、オフなどよむ類是なり。

漢字を幾やうにも訓讀し得べきものには、下に假名を添へて、これを區別す。例へば 行く 行ふ 生く 生む 生ふ の類是なり。これを送假名と云ふ。

神 辻 峠 畠 躰 廳 などの字は、わが國にて作れるものにて、これを和字といふ。故に訓ありて音なし。

第三章 假名

假名はわが國にて創作したるものにて、その書體に平假名と片假名とあり。平假名は漢字の草書より來り、片假名は漢字の扁旁冠等を取りて作りたるものなり。假名には清音假名・濁音假名・拗音假名等の別あり。

第一節 清音假名

片假名	平假名
ア行	あいうえお
カ行	かきくけこ
サ行	さしすせそ
タ行	たちつてと
ナ行	なにぬねの
ハ行	はひふへほ
マ行	まみむめも
ヤ行	やいゆえよ
ラ行	らりるれろ
ワ行	わをうゑを

アイウエオ
列列列列列

あいうえお
列列列列列

清音の假名は、すべて五十あり。これを右の如く排列したるを五十音圖といふ。圖中、縦のならびを行といひ、横のならびを列といふ。

五十音の中、ア列に在る音は、これを長く發音する時は皆アといふ韻あり。イ列の音は、イといふ韻あり。ウ列の音は、ウといふ韻あり。エ列の音は、エといふ韻あり。オ列の音は、オといふ韻あり。ア・イ・ウ・エ・オの如き韻を母韻といふ。

母韻と子音と合して成りたるものを熟音といひ、また、單に音と稱す。即、カ行より以下の四十五音これなり。子音とは、カ行より以下九行の諸音の、母韻の外にその音を呼び起す一種の聲をいふ。

五十音の中、ア行・ヤ行・ワ行には互に同形の文字あり。これ

らは通用して區別を立てず。

ア行 アイウエオ
ヤ行 ヤイユエヨ
ワ行 ワヰウヱヲ

あいうえお
やいゆえよ
わゐうゑを

第二節 濁音及び半濁音の假名

濁音假名はすべて二十あり。清音のカ行・サ行・タ行・ハ行の假名の右肩に、二箇の小點を附けてこれを表す。

片假名

平假名

カ行 ガギグゲゴ
サ行 ザジズゼヅ
タ行 ダヂヅデド
ハ行 バビブベボ

がぎぐげご
ざじずぜぞ
だぢづでど
ばびぶべぼ

ア
列
イ
列
ウ
列
エ
列
オ
列

あ
列
い
列
う
列
え
列
お
列

半濁音假名はすべて五あり。清音のハ行の假名の右肩に
圈點を附けてこれを表す。

片假名

平假名

ハ行 バピプベボ

ばびぶべぼ

第三節 拗音假名

汽車 種類 處分 菓子

右の シャ シュ ショ クワ の如く、二音を合呼して一音の
如く發音するを拗音といふ。拗音の假名は、ヤ行の ヤ ュ
ヨ とワ行の ワ とを、ある假名(イ列及びウ列の假名)の
下方右側に細書してこれを表す。即、左の如し。

イ列

きや	しや	ちや	にや	ひや	みや	りや
きゆ	しゆ	ちゆ	にゆ	ひゆ	みゆ	りゆ
きよ	しよ	ちよ	によ	ひよ	みよ	りよ
ぎや	じや	ぢや	びや	びや		
ぎゆ	じゆ	ぢゆ	びゆ	びゆ		
ぎよ	じよ	ぢよ	びよ	びよ		

ウ列

くわ
ぐわ

右に擧げたるは、通常用ふる拗音なり。拗音に對して、清音・
濁音・半濁音を總稱して直音といふ。

第四節 撥音及び促音の假名

天氣最よし。

右にあげたる テンキ の ン の如く、ある音の下にありて、はぬる音を撥音といひ、モットモ の如く、ある音を連呼する際に、その中間にて、つまる音を促音といふ。

撥音及び促音は、左の假名を用ひてこれを表す。

片假名 平假名

ン ン
ッ つ

第四章 假名遣

假名は元來音標字なれば、一字にて一音を表し、決して他音に通用すべきものにあらず。然れども、時代の變遷によりて發音の變化を生ず。かの直音の中なる いゝゝ えゝゝ お

を などは、今日最早區別しがたく、じぢ ずづ の如きも、ある地方を除くの外同一に發音し、又拗音中の くわぐわ も、直音 かが の如く發音する地方あり。又 はひふへほ の五音も、一語の中下にあるときは、連聲の便より わいうえお の如く發音する故に、假名にて記す時に紛はしきこと多し。然れども、今日にては尙その假名を書き分けて、その意義を區別せり。

漢字の音を假名にて書く場合にも亦然り。例へば、京恐夾、喬は皆一樣に きょう と發音すれども、京は きょう、恐は きょう、夾は けふ、喬は けう と書かざるべからず。かくの如く、字音に對する假名遣を字音假名遣といひ、字音假名遣に對して、わが國語の假名遣を國語假名遣といふ。

吾等はある語に對して、何れの假名を用ふべきかは、字書又は假名遣の書によりて、一一これを記憶せざるべからず。

練習問題

- 一、左の漢字の扁の名稱を述べよ。
清。冷。仁。行。枝。技。袖。社。語。
- 二、音と訓と、並に漢音と吳音との區別を述べよ。
- 三、五十音圖の順序によりて、ア列以下各列の音を述べよ。
- 四、拗音撥音及び促音を含める語を各三つ以上舉げよ。
- 五、片假名にていろは歌を記せよ。

單語及び文章篇 (上)

第一章 品詞の別

聲音と假名と相異なるものあるが如く、我等の日常使用する談話と文章とも、亦異なること多し。

- (一) 美しき花咲きたり。美しい花が咲いた。
- (二) これを君に贈らむ。これをあなたにあげませう。
- (三) あゝ、實に美しく、且、にほひよき花なり。あゝ、實に美しく、そのうへにほひがよい花だ。

かく、口語と文語とは、各別あり。文法とは、文語に存する法則を示すものなれども、常に口語と比較對照して、その異同に注意するを要す。さて、右の例にて、

- 一、花 櫻 の如く、事物の名を示す語を名詞といひ、
- 二、咲く 贈る の如く、事物の動作を表す語を動詞といひ、
- 三、たり む の如く、動詞に添ひて、その意味を助くる語を助動詞といひ、
- 四、美し よし の如く、事物の性質・状態を表す語を形容詞といひ、
- 五、實に の如く、形容詞等に添ふ語を副詞といひ、
- 六、あゝ の如く、感動する時に發する語を感動詞といひ、
- 七、且 の如く、上下の語句をつゞくるものを接續詞といひ、
- 八、これ 君 の如く、事物又は人の名のかはりに用ふる語を代名詞といひ、
- 九、を に の如く、他語の間にありて、その關係を定むる語

を助詞といふ。

單語は性質の差によりて九に分る。これを九品詞といふ。

第二章 名詞

花 鳥 日本 支那 紫式部 春 秋 勉強 幸福
 等の如く、事物の名稱として用ひらるゝ語を名詞といふ。

日本 支那 紫式部 鹿島艦 靖國神社 等は、その事物に限りて他に通用せられぬ名詞なれば、これを固有名詞といひ、花 鳥 春 秋 勉強 幸福 等は、他の同じ類の事物に通用せらるゝ名詞なれば、これを普通名詞といふ。
 左の文章中にある普通名詞と固有名詞とを指示せよ。

- 一、春日局は徳川家光の乳母なり。
- 二、貝と權との假名はちがひます。

- 三、 萬事に後れを取ることなかれ。
- 四、 東京は日本の首府であります。
- 五、 金剛石も磨かずば玉の光は添はざらむ。

第三章 代名詞

紫式部は才女なり といふ代りに、彼は才女なり といひ、仙臺は廣島より寒し といふ代りに、こゝはかしこより寒し といふを得べし。かくの如く、名詞の代りに用ふる語を代名詞といふ。

われ 汝 かれ 御前様 などは、人の氏名の代りに用ふる語なれば人代名詞といひ、これ それ こゝ かしこ こなた そなた 等は、事物・場所・方向をさして、その名の代りに用ふる語なれば指示代名詞といふ。

二種の代名詞の大略を擧ぐれば、左の如し。

人代名詞		指示代名詞	
わ	われ	こ	これ
か	かれ	そ	それ
お	おのれ	か	かれ
な	なむぢ	な	なに
た	たれ	い	いづれ
こ	こなた	い	いづこ
そ	そなた	い	いづか
か	かなた	い	いづかた

左の文章中にある人代名詞と指示代名詞とを指示せよ。

- 一、 かしこに居る人は、誰ですか。
- 二、 これとそれとは、いづれかよき。
- 三、 汝はかの人といつゝの頃より交れるか。
- 四、 こなたに流るゝは、何といふ河なるぞ。
- 五、 私はあなたを姉上と仰がむ、君はわれを妹と見給へ。

第四章 動詞

花咲く 本を讀む 著物を著る などの 咲く 讀む
 著る の如く、事物の動作を表す語を動詞といふ。
 彼處に山あり かなたに島見ゆ かの子は母に似る
 などの 有り 見ゆ 似る 等は、事物の動作にあらずし
 て、状態をいひ表す語なれども、尙動詞なり。故に動詞には、稀
 に状態をいひあらはすものありと知るべし。

左の文章中の動詞を挙げよ。

- 一、 山を越え、海を渡る。
- 二、 錦を著て故郷にかへる。
- 三、 月落ち、鳥鳴きて、霜天に滿つ。
- 四、 猫は花下に眠り、鳥は梢に囀る。

五、 あなたの沖に霞みて見ゆるは大島なるべし。

第一節 四段活用及び變格ナ行・ラ行活用

花咲かず。

花が咲かない。(ぬ)

花咲きたり。

花が咲いた。

花咲く。

花が咲く。

花咲けばおもしろし。

花が咲けばおもしろい。

右の如く、咲く といふ動詞が、用ひ方によりて種々に語形の變化するを見るべし。これを動詞の活用といふ。即、

咲かきくけ

の如く、語頭は變化せずして語末の變化するを見る。かく、變化せざる部分を語幹といひ、變化する部分を語尾といふ。動詞の活用とは、畢竟語尾の變化を稱するなり。

さて、咲か 咲き 咲く 咲け の如く、五十音圖の ア・イ・ウ・エ の四列に語尾の變化するものを四段活用の動詞といふ。動詞の多數はこの活用に屬す。

						語幹	語尾
ラ	マ	ハ	タ	サ	カ	書	ア
行	行	行	行	行	行	指	イ
釣	讀	問	立	指	書	か	ウ
						さ	列
						ち	列
						す	列
						せ	列
						け	列
						め	列
						へ	列
						て	列
						れ	列

四段活用は カ・サ・タ・ハ・マ・ラ の六行あるのみにて、これをカ行四段活用・サ行四段活用などと稱す。以下皆これに

准ふべし。

(注意)一、ハ行四段活用の動詞は、常にワ行に發音す。

二、動詞の活用を知る便法は、ある動詞に打消のす(口語にてはな^い又はぬ)を連ね見よ。行か^ず 讀ま^ず の如く、ア列よりず^にに續くものは、すべて四段活用の動詞なりと知るべし。

死^なず 往^なず 有^らず 居^らず 等^は、何れもア列よりず^にに續く故に、四段活用の如く思はるれど、死^ぬ 往^ぬ の二語は、死^ぬる人 往^ぬれば淋^し の如く使用する事あり。かく 死^ぬる 往^ぬれ などとはたらくこと四段活用になければ、これをナ行變格活用といふ。又 有^り 居^り などは、こゝに人有^り 白^き岩の上に黒^鳥居^り の如く、^りにて文章をいひ切れども、ラ行四段活用にあ

りては、魚を釣る 池を掘る の如く、る にていひ切るを常とす。かく相異なる點あるを以て 有り 居り の如き語をラ行變格活用といふ。以上二の活用を表示すれば左の如し。但、口語にては、これらの語何れも四段活用にはたらかせり。

		語幹 / 語尾
ナ行	死 ^シ 往 ^イ	ア列
ラ行	侍 ^シ 居 ^テ 有 ^ア	イ列
	ら	ウ列
	り	ル
	る	レ
	○	エ列
	○	
	れ	

(注意) ナ行變格、ラ行變格活用の動詞は、右の表に掲げたる五のみなれば、こ

れを記憶して、その他の語にて、ア列の音よりずに續くものは、すべて四段活用なりと知るべし。

左の語を活用せしめて、その語尾の變化を示せ。

飽く 集る 交る 祝ふ 誘ふ 待つ 消す 附く
放つ 歎く 争ふ 走る 致す

第二節 上一段活用・上二段活用

本を見たり。

本を見た。

本を見る。

本を見る。

本を見れば面白し。

本を見れば面白い。

右の み みる みれ の如く、イ列の一段に變化し、更にそれに る れの添ひて活用するものを上一段活用といひ、左の六類あり。

	カ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ
語幹	行	行	行	行	行	行
語尾	(著 ^キ)	(煮 ^ニ ・似)	(干 ^ヒ)	(見 ^ミ)	(射 ^イ ・鑄)	(居 ^ヰ ・率)
イ列	き	に	ひ	み	い	ゐ
ル	る	に	る	る	る	る
レ	き	に	ひ	み	い	れ
	れ	れ	れ	れ	れ	れ

(注意)

一、上一段活用はカ・ナ・ハ・マ・ヤ・ワの六行にして、活用する語も右の表に掲げたるもの、外になし。但 顧る 惟る 鑑る 等の語は、この段の見る と他の語との熟合したるものなれば、その活用見るに同じ。

二、上一段活用は文語と口語とその活用同じ。但、射る 鑄る は口語にてラ行四段に活用せしむる地方あり。

早く起きむ。

早く起きよう。

早く起く。

早く起きる。

早く起くる人。

早く起きる人。

早く起くれば心地よし。

早く起きれば心地がよい。

右の 起き

起く

起くる

起くれ

の如く、語尾のイ

ウ二列に變化し、而してウ列の段に更に

るれを添へ

て、活用を助くるものを上二段活用といひ、左の六類あり。

	カ	タ	ハ	マ	ヤ
語幹	行	行	行	行	行
語尾	生 ^イ	落 ^オ	強 ^シ	恨 ^ミ	報 ^ヘ
イ列	き	ち	ひ	み	い
ウ列	く	つ	ふ	む	ゆ
ル	る	る	る	る	る
レ	く	つ	ふ	む	ゆ
	れ	れ	れ	れ	れ

老

ラ	行	懲	り	る	る	る	る	れ
---	---	---	---	---	---	---	---	---

(注意) 一、上二段活用はカ・タ・ハ・マ・ヤ・ラの六行にして、口語にては、ある地方を除くの外、悉く上一段に活用せり。

二、上一段活用及び上二段活用は、打消のずを續くる時は、何れもイ列の音より續く。されど、上一段の動詞は、右の表に掲げたる語より外になければ、よくこれを記憶して、その他は上二段の動詞と知るべし。

左の圈點の箇所に適當なる假名を入れよ。

- 一、老〇ては子に従ふ。
- 二、怨に報〇るに徳を以てす。
- 三、強〇て飲食物をすゝむるは宜しからず。
- 四、頼朝軍を率〇て浮島原に陣す。
- 五、悔〇る事なきやう注意すべし。

第三節 下一段活用・下二段活用・サ行變格活用

鞠を蹴たり。

鞠をけた。

鞠を蹴る。

鞠をける。

鞠を蹴れば高く揚る。

鞠をければ高く揚る。

右の け ける けれ の如く、エ列の一段に變化し、更にそれに る れ の添ひて活用するものを下一段活用といひ、左の一語あるのみ。

カ	行	語幹	語尾	エ	列	ル	レ
		(蹴)					
け	ける	けれ					

(注意) 下一段活用は文語口語その活用相同じ。但、ある地方にては、ラ行四段に活用せしむることあり。

- | | |
|--------|--------|
| 空晴れけり。 | 空が晴れた。 |
| 空晴る。 | 空が晴れる。 |
| 空晴るゝ朝。 | 空が晴れる。 |

空晴るれば熱し。 空が晴れば熱い。
 右の 晴れ 晴る 晴るる 晴るれ の如く、語尾エ・ウ
 の二列に變化し、ウ列の段に更に るれ を添へて、活用
 を助くるものを下二段活用といひ、左の十類あり。

							語幹	語尾
マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	行	(得)
行	行	行	行	行	行	行	行	行
譽	添	兼	捨	寄	受	得	エ	列
め	へ	ね	て	せ	け	え	ウ	列
む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ル	レ
む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ル	レ
る	る	る	る	る	る	る	ル	レ
む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ル	レ
れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	ル	レ

ワ	ラ	ヤ
行	行	行
植	晴	消
ゑ	れ	え
う	る	ゆ
う	る	ゆ
る	る	る
う	る	ゆ
れ	れ	れ

(注意) 一、下二段活用はア・カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワの十行にして、口語にては、ある

地方を除くの外悉く下一段に活用せり。

二、下一段活用下二段活用の語は、何れもエ列の音より打消のず^レに續く
 けれど、下一段に活用する語は、蹴る の一語のみなればその他は
 下二段活用と知るべし。

勉強せず 勉強したり 勉強す などの せしす
 は、皆 爲^ス といふ動詞の活用したるものなり。而して
 勉強せず の如く、エ列の音より打消のず^レに續く故に、下二
 段活用の如く思はるれど、しと活くこと下二段活用になし。

これをサ行變格活用といふ。

サ行	語幹	エ列	イ列	ウ列	ル	レ
	語尾					
御座	(爲)	せ	し	す	する	すれ

注意一、サ行變格活用の動詞は右の表に掲げたる二語のみなり。されど、罪
 ず、敬す、花見す、戦争す、議論す、變ず、等の如く、名詞及び漢
 語を動詞に轉用する場合には、必この活用に活かす故に甚必要なる
 活用と知るべし。

二、口語にてはすの活用なけれど、その他は文語と同一なること試みて
 知るべし。

三、下二段活用中、ア行、ヤ行、ワ行は發音相似て紛はしけれど、ア行は 得
 の一語、ワ行は 俄、植、据 の三語のみなれば、その他の語はす
 べてヤ行なりと知るべし。

左の文章に誤あらば正せ。

- 一、 高く聳ふる山を越へ行く。
- 二、 この品物に手を觸れるなかれ。
- 三、 困難に堪えて勉強する人、近來絶へてなし。
- 四、 指折り數えて御待ち申居り候えども、今に御出なく候。
- 五、 彼は凍へて死にたるにあらす、飢えて死したるなり。

第四節 カ行變格活用

- | | |
|-----------|------------|
| 友人こそ。 | 友がこない。 |
| 友人きたり。 | 友がきた。 |
| 友人く。 | 友がくる。 |
| 友人のくる頃なり。 | 友がくる頃だ。 |
| 友人くれば嬉し。 | 友がくればうれしい。 |

右の如く、この語はオ列の音より打消のずに續き、且四段活用と下二段活用と混ざるが如きものなり。これをカ行變格活用といふ。

カ行 (來)	語幹	オ列	イ列	ウ列	ル	レ
	語尾	こ	き	く	くる	くれ

カ行變格活用の動詞は、この一語より外になし。又口語にては、くの活用なけれど、その他は文語と同一なること右の例にて知るべし。

以上學びたる所によりて、動詞の活用に九種あること、並に、ある活用の動詞は、その數僅少なることを知るべし。

- 一、 四段活用
- 二、 上二段活用
- 三、 下二段活用

- 四、 上一段活用(九語)
- 五、 下一段活用(一語)
- 六、 カ行變格活用(一語)
- 七、 サ行變格活用(二語)
- 八、 ナ行變格活用(二語)
- 九、 ラ行變格活用(三語)

第五節 動詞の語尾の假名遣

動詞の假名遣は、その活用の行を考へて知り得べし。例へば、

- (一) 沿ひ行く。 字を教ふ。 困難に堪へぬ。
 - (二) 恩に報いむ。 過を悔ゆ。 燈火消えたり。
 - (三) 率ゐ行く。 松を植う。 士卒飢ゑけり。
- の如く、何れも同様に發音すれども、(一)はハ行、(二)はヤ行、(三)は

ワ行に活用する語なれば、その假名も亦異ならざるべからず。この他、

戸を閉ぢつ。

舟 出づ。

色を變じぬ。

蟲 生ず。

の如きも、活用の行を考へて、容易にその差異を知り得べし。この方法によりて、左の名詞に適當なる假名をつけよ。

手習

鳥居

拂下

栗拾

相老の松

教子

燃木

据膳

門構

植木の鉢

獲物

恥

紅葉

左の文に誤あらば正し、且口語なるは文語に改めよ。

一、春植えたる菊は今咲きそめぬ。

二、學びて厭わず教ひて倦まず。

三、鷹は餓へても穂をつまなひ。

四、見へるけれど聞へなす。

五、猿も木から落ちる事あり。

六、覺へた事は知らぬ人に教えるがよい。

七、荷物を載せる車を貨車といふ。

八、財貨は盡きることあれど、芳名は朽ちることなし。

九、許をえることなくして品物に手を觸れる事を禁づる。

十、人は皆社會に盡すべき義務を有する、空しく死ぬは鳥獸にも劣る。

第五章 形容詞

高き山 樂しき遊 月清し 冬は寒し などの 高き
樂しき 清し 寒し は、事物の状態・性質をいふ語なり。か
くの如き語を形容詞といふ。

山高く聳ゆ。

山が高く聳える。

山高し。

山が高い。

高き山。

高い山。

山高けれども貴からず。山高けれども貴くない。

右の例にて形容詞にも動詞の如き活用あることを知るべし。但、その活用は動詞の如く五十音圖の一行に止まらずして、カ行とサ行とに跨れり。

	語幹	語尾
清 <small>キヨ</small>	高 <small>タカ</small>	
く	く	ク
し	し	シ
き	き	キ
け	け	ケ
れ	れ	レ

形容詞の活用は、この一種あるのみ。但 樂し 美し 等の如く、語幹にししの音ある語は、通常 樂し 美し といひ

て、ししを重ねざるを常とす。即、左の如し。

	語幹	語尾
美 <small>ウツクシ</small>	樂 <small>ウツクシ</small>	
く	く	ク
〇	〇	〇
き	き	キ
け	け	ケ
れ	れ	レ

口語にては、ししの語尾いとなり、くくの語尾往々うに轉呼することあり。これを形容詞の音便いひ、文語にも往々これを用ふ。左の文章中にある形容詞を指示し、且その活用を示せ。

- 一、古きを温ねて新しきを知る。
 - 二、遠き慮なければ必近き憂あり。
 - 三、身は卑しくとも、心だに清くば尊き人といふべし。
- 左の文章に誤あらば正し、且口語なるは文語に改めよ。
- 一、宜しふ御傳へ下されたく候。
 - 二、樂しひ時には苦しむ時の事を思へ。

- 三、あの歌は面白いけれどむづかしい。
- 四、うれしいとてむやみに喜ぶに及ばぬ。
- 五、この山は高いけれど大木はすくない。

第六章 助動詞

花は咲かず 秋は過ぎけり 雨降るべし 本を讀まし
 む などの ず けり べし しむ は、動詞の下に連り
 て、その意味を助くるものなり。かゝる語を助動詞といふ。
 犬は動物なり 汝は汝たり 我は我たり の なり
 たり などは、名詞・代名詞に連りて、その意を助くる語なれ
 ど、尙助動詞なり。故に助動詞の中には、稀に名詞等に連るも
 のありと知るべし。

助動詞にも語尾の變化あり、これを助動詞の活用といふ。

その活用は、動詞に等しきあり、形容詞に等しきあり、又二
 段・三段に活用するもありて一様ならず。故に活用の方法に
 よりて、助動詞を左の種類に分つ。

一 下二段の活用に等しきもの

讀まる 受けらる 讀ます 受けさす 讀ましむ 讀
 みつ などの る らる す さす しむ つ の六は
 下二段と同じき活用をなす。

る	れ	る	る	る	れ
ら	れ	ら	る	らる	らるれ
す	せ	す	す	する	すれ
さ	さ	さ	さ	さする	さすれ
し	し	し	し	しむる	しむれ

つ	て	つ	つ	つ	つ	れ
---	---	---	---	---	---	---

二 ヲ行變格の活用に等しきもの
 字を書けり 證書を受けたり 書を読むなり などの
 たり なり は、ナ行變格と同じき活用をなす。

り	ら	り	る	れ
たり	たら	たり	たる	たれ
なり	なら	なり	なる	なれ

三 ナ行變格の活用に等しきもの
 書を読みぬ 證書を受けぬ などの ぬ は、ナ行變格
 と同じき活用をなす。

ぬ	な	に	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ
---	---	---	---	---	---	---

四 形容詞の活用に等しきもの

書を読みたし 證書を受くべし 字を書くまじ 歲月
 は流るゝごとし などの たし べし まじ ごとし
 は、形容詞と同じき活用をなす。但 ごとし の一語は、ご
 とけれ とは活用せず。

た	し	た	く	た	し	た	き	た	けれ
べ	し	べ	く	べ	し	べ	き	べ	けれ
ま	じ	ま	じ	ま	じ	ま	じ	ま	じけれ
ごとし	ごとく	ごとし	ごとし	ごとき					

五 三段に活用するもの

書を読まず 證書を受けき 字を書きけり などの
 ず き けり は、左の如く活用す。

ト変に等し、トは、
 秋さぬ、秋がた
 となつてもはや
 よん、だ、と
 二段の、
 人も
 見えぬ、
 人もみえぬ、
 となりて打消する
 打消の、

す	す	ぬ	ね
き	き	し	し
り	り	ける	け
け	け	る	れ

六 二段に活用するもの

書を讀まむ 證書を受くらむ 字を書きけむ などの
 む らむ けむ は、左の如く活用す。

む	む	め
ら	ら	ら
む	む	む
け	け	め

七 活用せぬもの

書を讀まじ 字を書くらし などの じ らし は、活
 用せず。

以上は、最普通に使用する助動詞のみを挙げたるなり。その餘は後に至りて説くことあるべし。さて、右の活用につきて考ふるに 讀みき 讀みし時 讀みしかば の き し しか は、同一の助動詞なるを知るべく、書きてけり 書きつ 書きつる人 書きつれども などの て つる つれ も、亦同一の助動詞なるを知るべし。

左の文章中にある助動詞の活用を示せ。

- 一、 秋になりたれど、暑さいまだ去らず。
- 二、 彼は思慮に富みける人なりき。
- 三、 空は曇りぬれど、雨は降るまじ。
- 四、 民富みなば國もおのづから榮ゆべし。
- 五、 昔の旅はさこそ苦しかりけめと思はる。
- 六、 秋來ぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞ驚かれぬる。

副詞は他の動詞

形容詞又副詞

といふその意味を修飾

限定するもの

第七章 副詞

早く起く はらはらと散る 甚高き山 などの 早く
はらはらと 甚 は下にある動詞・形容詞に副ひて、その意
味を限定するものなり。かくの如き語を副詞といふ。

甚熱心に勉強す いと早く起く などの 甚 いと
は、他の副詞を限定せるなり。かく、副詞は動詞・形容詞のみな
らず、他の副詞を限定することあり。

副詞は動詞を限定し、助動詞は動詞を助くるものなり。又、
助動詞は動詞の下に連り、副詞は動詞の上にあるを常とす。
但 よく文字を書く 久しくかの人には逢はず の如く、他
の語を隔て、下なる動詞を限定することもあり。

副詞を語の形體等によりて、その種類を分てば、左の如し。

(イ) 助詞の添はぬもの

いと	甚	最	悉	皆	必
頗	專	曾	先	蓋	猶
唯	聊	凡	豈	暫	忽
稍	只	管	未		
つらつら			たびたび		をさをさ
なかなか			やうやう		しばしば
いよいよ			くれぐれ		

(ロ) 語末に、に、といふ助詞を添ふるもの。

常に 更に 僅に 俄に 既に
 夙に 殊に 遂に 實に 誠に
 (ハ) 語末に として といふ助詞を添ふるもの。
 そよそよと はらはらと からからと
 ほとほとと なよなよと しほしほと
 滔々として 颯然として

左の文章中の副詞を指摘せよ。

- 一、春も稍景色と、のふ月と梅。
- 二、風蕭々と吹きて、やうく秋めきたり。
- 三、昨日かの地に行きし人は、疾くかへりけり。
- 四、寒村僻邑に至るまで必學校の設ありて、教育の事頗盛なり。
- 五、余は聊思ふよしあれば、專音樂を修めむとまづこの學校に入りたり。

り。

左の文に適當なる副詞を加へよ。

- 一、この梅は美しい。
- 二、涼しい風が吹く。
- 三、こゝを通つてはならぬ。

第八章 接續詞

歌を詠み又箏を弾く 花は美しく且香ばし 毛筆或は鉛筆を持參すべし の 又 且 或は は、語句を續くるに用ふる語なり。これを接續詞といふ。

接續詞の例を擧ぐれば、おほむね左の如し。

又 且 將 則 但 或は
 さらば されど 然るに 然れども

左の文章中の接續詞を指摘せよ。

- 一、霞か、雲か、はた雪か。
- 二、學校より歸りて、家事を手傳ひ、且復習を爲す。
- 三、家事を齊へむには、裁縫或は手藝を習ひ、又料理法をも學ぶをよしとす。

第九章 感動詞

あら嬉し あな樂しや あゝ悲しいかな などの あら
 あな あゝ や かな 等は、事物に感動したるとき
 に發する語にて、これを感動詞といふ。
 や かな の如きは、他語の下に附屬するものなれば附
 屬の感動詞といひ、あゝ あな あら の如きは、他語の
 上におかれて、獨立せるものなれば獨立の感動詞といふ。

右二種の感動詞の例を擧ぐれば、おほむね左の如し。

(一) 獨立感動詞

あゝ あら あな あはれ あはや
 すは いで いざ やあ やよ いか

(二) 附屬感動詞

か かな かし かや がな なむ
 ばや や よ

左の文章中の感動詞を指摘せよ。

- 一、あゝ盛なるかな、女子の教育。
- 二、さびしく早く行けかし。
- 三、あはれ、いかに有益なる事よ。
- 四、家の風をも吹かせてしがな。
- 五、あら羨し、かの人には優等賞を得たりしぞや。



第十章 助詞

君が代は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで の が は に の と て まで は、他の語の間に挟りて、その關係を定め、又は種々の意を表す語なり。これを助詞といふ。所謂テニヲハ是なり。

助詞はその數甚多し。今最普通に使用するものを連續する語の種類によりて、大別すればおほむね左の如し。

第一 名詞・代名詞に連續するもの。

の が つ を に へ と と
より から まで

第二 動詞・形容詞・助動詞に連續するもの。

ウツガシ
花や咲さぬ
感動詞やうは
文章は申より
う月そのてててて
そは文と居る
こやうな
てんさほのやのは
は係詞とあつたは
えたうたのいれ
と河りはうたに
れと入れば其れ
竟又変化

第三 種々の語に連續するもの。

て づ ば と とも ど ども が に を な
は ば も ぞ なむ なしこそ だに さへ
すら のみ ばかり や か

助詞は活用せず。その意味につきては、後に説明すべし。

左の文章中の助詞を指摘せよ。

- 一、愚なりとも學ばばいかでか成らざらむ。
- 二、人にして禽獸にだに如かざるべけむや。
- 三、園内に植ゑたる樹木を折るな。
- 四、惜まれて散るを櫻のはまれかな。
- 五、今日こそはと今まで待ち暮しつるに、訪ひ給はぬのみならず文だに遣し給はぬは、いかなる故ぞ。

以上説きたる所によりて、國語には名詞・代名詞・動詞・形容

詞・助動詞・副詞・接續詞・感動詞・助詞の九種の品類あること、並に、活用する語と活用せざる語とあることを知りしなるべし。おほよそ、國語中の如何なる單語も、この九品詞に屬せざるものなし。

かく、國語を九品詞に分つは文法説明上の便宜より出たるものなれば、昔は、これを三に分ちて説明したることあり。即、名詞・代名詞の如く活用せざる語を體言といひ、動詞・形容詞の如く活用する語を用言といひ、助動詞・助詞の如く單獨に使用する能はずして、他の語に附屬して用を爲すものを助辭といへり。體言・用言・助辭の三大別は、今も尙必要のことあれば、よく記憶しおくべし。

左の諸文章を各單語に分解して、その品詞の名稱を示せ。

- 一、 わが身をつめりて、人の痛さを知れ。
- 二、 あなうれし、よろこばし、このから戦。
- 三、 人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し。
- 四、 今朝は雲霧なごりなく晴れて、海山はるくと見渡さる。
- 五、 あだに過すな今日の日を、今日は再加へりこす。

第十一章 熟語及び疊語

第一節 熟語

花園 編物 近寄る 物語る 青白し 物寂し など
 の如く、二個以上の品詞を合せて、一の單語と爲したるものあり。これを熟語といふ。

青白し 物寂し 聞苦し 細長し の如き熟語は、その用法並に活用、すべて形容詞に等し。

疊音

このうへに尾と
さへう田舎ん

約音

このうへに

オア

この音韻とかれ
子音をとる

約音

さ

子

近寄る 物語る 心指す(志) 受給る(承) の如き熟語は、
その用法並に活用すべて動詞に等し。

花園 編物 山川 夜寒 雨戸 河原 の如き熟語は、
その用法、名詞に等しきものなり。

熟語はその相熟合するため、元の語の音を轉じ、或は音を省約するこ
とあり。山川 里人 白酒 の如きは、下語の首音の濁音に變じたるな
り。雨戸 白雪 口輪轡 の如きは、上の語の末音の轉じたるなり。河
原 尾上 心地 の如きは、語中のある音を省きたるものにて、さゝげ
(差上) こなた(此方) の如きは、語中にある二音の一音に約りたるなり。

第二節 疊語

人々 度々 行くく いざく などの如く、同一の
單語を重ねて、一の單語と爲したるものを疊語といふ。

木々は皆花咲きたり。

秋の夜は長々し。

かならずく訪ひ給へ。

いざく花をながめむ。

右の如く、疊語は複数を示すか、若くは意味を強くするの
みにて、その重りたるが爲に元の品詞は變ぜざるものなり。
されど、

老いてますく壯なり。

代るく先生に質問す。

の如く、動詞を重ねて副詞としたるが如きこと、稀にあり。
次の文章中の熟語疊語を擧げ、その用ひられたる意味によりて、その品詞
の名稱を示せ。

- 一、人々は春著の仕度にいそがはし。
- 二、この畫の色どりは、配合見にくし。
- 三、ゆめ〜輕々しき振舞を爲すことなかれ。
- 四、道具立のみ事々しくする人は、却つて仕事の拙きものにて、かへす〜も見劣せらるゝものなり。
- 五、度々逢ふ人もなれ〜しくすべからず、時々尋ぬる友もうと〜しきもてなし、あらぬやう心がくべし。

第十二章 文 (主語・述語)

花咲く。 山高し。

右の如く、二個以上の單語を連ねて、完全なる思想を表したるものを文或は文章といふ。而して、右の花 山 は、思想の主たる事物を表す語にして、文の題目たるものなり。

咲く 高し は、題目たる事物が如何にしたるか、又は如何にあるかを説述したるものなり。前者を主語といひ、後者を述語といふ。

完全なる文には少くとも主語と、述語とを具備せざるべからず。若し二者その一を缺くときは、如何に長くとも文といふべからず。故にこの二つは、文を構成する要素なり。而して主語となるべき語は體言にして、述語となるべき語は用言なり。

左の文につきて、主語と述語とを指示せよ。

- 一、鳥が鳴く。
- 二、我が軍勝ちたり。
- 三、暖き春風吹きぬ。
- 四、父上歸宅せられしか。

五、新校舎は最早落成せむ。

女子教科 日本文典上卷 終

明治四十年八月一日印
明治四十年八月五日發
明治四十年十二月廿四日訂正再版印刷
明治四十年十二月廿八日訂正再版發行

女子教科 日本文典上、中、下卷

定價各金拾八錢

著者 西岡嘉藏

發行兼印刷者

東京市神田區南乗物町九番十番地

明治圖書株式會社

專務取締役 三樹一平



發行所

東京市神田區南乗物町九番十番地

明治圖書株式會社

長電話本局八九二 振替口座四九二五
電話本局一六四 電信署號(夕上)

本科第二学年甲組

林

のよ

